
Re : Memory

n a k o s o

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

Re:Memory

【コード】

N5395D

【作者名】

nakoso

【あらすじ】

かつて父親はサックスプレイヤーだった。そんな姿、俺は一度も見た事がないんだけどね。身近な楽器であるサックスを始めた俺だけど。結局ね、楽器なんてできても得はないんだよ。

哲司^{てつし}の反応は、やはり思った通りだった。

「バンドをやめるだあ!？」

家の近くにあるファミレスで、俺は哲司と一緒にブレンドコーヒー（お替り自由）を飲んでいたわけだが。

「そんな大声出すなって」

予想通り、とはいえ、俺は眉をひそめた。近くのテーブルにいたカップルが驚いてこっちを見、俺と目が合つと慌てて視線を逸らせた。

「マジかよ、修^{しゅう}? 今までそんな素振り、全然見せなかったじゃんか？」

「大学とバイトで忙しくなるんだよ。バンドまで手が回らねえんだ」「あつちや〜」

ぺしっ。

額を手の平で叩き、哲司が身を反る。こいつが困った時に見せるリアクションだ。

「おまえがいなくなっちゃったら、せつかく徹夜して作った曲が無駄に……」

「哲司だったらどんな風にもアレンジできるだろ？」

「あさつて、スタジオで合わせてみようと思つたのによお」「わりいね」

と言つて、俺は残り少ないコーヒを一気に飲み干した。

「いきなしたもんなあ。てかよ、もちつと前に相談とかするもんだろ？」

本気で困惑顔な哲司に乾いた笑顔を向けて、

「あ、すみません。お替りお願いします」

ちようど近くを通りかかったウェイトレスさん呼び止めた。

サククスを始めたのは、まだ俺が十一の頃だった。父親が物置にしまいつ放しだったサククスのハードケースを見つけた俺は、好奇心だけでいじり始めた。

それがアルトサククスだとも知らなかった。

俺が興味を抱いた事に喜んだのだろう、父親はいつになくうれしそうに吹き方を教えてくれた。

『サククスを吹こうなんて、これも血筋だねえ』

物置から見つけ、ほこりのかぶったハードケースを持って行った時の、父親の言葉。

『まだ父さんが学生だった時な、一人暮らしするにも金がなかったんだけど、よく吉祥寺駅前で吹いて小銭集めてたんだぞ』

聞いてない事まで子供に話すというのが親であって。

『そこで、母さんと出会ったんだ。俺が吹いてる時に母さんが偶然聞いてな、いつもやってるんですか？って話しかけて来て。あの時の俺は若かったなあ。あなたが聞いてくれるのでしたら毎日やりますよ？なんて言って……』

この後しばらく馴れ初めが続くだけけれど、あえて省略するとしてよう。

しかし母親は冷めたもので。

『サククス吹いてる父さんだから結婚したのに、まさかサラリーマンになるなんて……失敗したわ』

結局、楽器ができても得なんて何も無い。

父親が今でも契約会社に頭を下げているのと同様に。

哲司に引退宣言を出した翌日。

「修くん！」

大学の帰り道。

駅で声をかけて来たのは、父親の、高校からの友人である川島さんかわしまだった。

「いやあ、暑い暑い！」

川島さんに誘われるまま、俺は喫茶店に入った。テーブルに先に着いた川島さんは、ネクタイを緩めると手で顔を仰いだ。

やって来たウェイトレスにオーダーを尋ねられれば、川島さんの早い口がすぐに動く。

「アイスコーヒーをお願いします。こんな日はこれが一番なんだよね。修くんは？ 俺のオゴリだから何でも頼みなよ」

「じゃあ……同じもので」

「アイスコーヒー二つね。よろしく」

いつでも川島さんはテンションが高い。

父親が吉祥寺でサクスを吹いていた時、一緒にウッドベースを弾いていたのが川島さんだ。父親の一番の親友であり、そして両親の結婚までを知っている。そのせいかどうかは知らないが、時折、家族を連れてウチに遊びに来る。

「あの、会社は平気なんですか？」

現在、PM2:30。

立派な社会人である川島さんが、こんな所でゆっくりして大
丈夫なのだろうか？

「全然平気っ。今日は契約会社とのちよっとした打ち合わせだけだ
から。修くんは講義終わって直帰でしょ？ 大学はどう？ バイト
もやってるんだっけ？」

一体、どの質問から答えればいいのか？ とりあえず、最後
の質問だけに答える事にする。

「今日は四時からです」

「大学にバイトかぁ。その上バンドもやってるんだからすごいよ。
若いからできる所業だ」

この人が黙っているところを、今だかつて見た事がない。父親い
わく、プロポーズしようと思った日以外、まったく黙った事がない
らしい。

哲司の性格が父親譲り100%ではなくて良かったと思う。

「若いからやりたい事いっぱいあって」

まだ哲司から聞いてはいないらしい。昨日の今日だから仕方ない
か。

バンドをやめたと、やはり言った方が良かったのだろうか？ つ
い話を合わせてしまったのだけれども。

「修君、どんどん篤史アツシに似て来たねえ。『若い時に好きな事やらな
いと損だから』ってよく言ってたよ」

その結果が今の姿か。平日は朝早くから出勤、帰宅は夜の12時
近く。休日はずっと家でゴロ寝。体を起こすのは、三度のメシ時、
風呂に入る時、そして掃除機をかける母親に「邪魔」と言われる時
ぐらい。

「けれど最近の若い人にとって現代社会は生きづらいんじゃない？
俺ら社会人だけじゃなく若い人まで働かせてる。若い人はもつと
自分勝手に生きてもいいんじゃないかな、本来」

「そうしたいですけど 何せ、時間も金もありませんから」

と俺、苦笑。

「これ、まるつきり篤史からの受け売りなんだけどね」

え？

「世の中にはもうすでにレールがすっかり整備されてあつて、子供たちは親にその上に置かれてる。だから今の子供たちの多くは他人と違う事ができない。完全なオリジナルになる事なんか不可能なんだ」 あ、今の話、難しかった？」

「……何となく、わかります」

いきなり何を話すのかと思いきや けれど、我知らずぎこちない返事をしていた。川島さんはそれを察したらしく、豪快な笑い声を上げた。

「俺もよくわかんないんだけどね。篤史に直接聞いてみるといいよ」「そうですね」

にこやかに応えたものの、そんな気にはならない。

「修くん。篤史がどうしてサックスをやめたか知ってる？」

川島さんは相変わらずの笑顔で速やかに別の話題へ移行した。

「はい？ いや、知りませんけど」

どうしていきなり川島さんがそんな話題を始めたのか 『父さん』つながりによる転換？

しかし、いつも川島さんが突拍子もない話題転換を繰り返す人物だと思えば、自ずと、いちいち考えるだけ無駄だと無意識の内に思える。

「篤史と俺が出会ったのは高校でだっていう話はした事あるよね」 たしかに聞き覚えはあった。川島一家がウチに遊びに来た時の恒例『青春時代の懐かし話』で、何度か耳にした事があるのだろう。

「その時、もうすでに篤史はサククスを始めてて、俺は軽音楽部でベースを弾いていた。何を思ってたか、篤史は俺に『一緒に音楽やんない？』って来たわけだ。初対面だったのに突然声をかけて来たしかも、『一緒に音楽やんない？』だよ　そんな篤史に、もちろん最初はノリ気じゃなかった。音楽的嗜好も違ってたしさ」

「じゃあ、どうしてやり始めたんですか？」

自然と俺の口から疑問が出る。

「一回だけ曲を合わせてみたんだよ。そしたら、すごい楽しかったのを今でも憶えてる。サククスとベース　組み合わせ的には極めてシンプル、それだけに曲的な拡がりには欠けると思ってたんだけど、やっぱり篤史が上手かったんだろうね、とつても濃い曲を弾いていた。何て言うかな、こう　初めて、ジャンルとは無縁の音楽に触れた、みたいなの」

話していくにつれて、川島さんの笑顔が懐かしみを帯びて来た。

「はあ……」

父親から何度も話を聞いている事だが　尋常でないほどにのめり込んでいたサククス。

どうして父親はそのサククスをやめたのか　そこまでは、父親の口からは聞いた事がない。

「大学入って、それでもまだ篤史と音楽をやり続けてた。けどね、ある日篤史が言った……」

そこで中途半端に川島さんの言葉が途切れた。何て事はない、オーダーしたアイスコーヒーが届いただけ。

「ありがとね」

ウェイトレスに愛想のいい挨拶をすると、川島さんはすぐにガムシロップとクリームを入れてストローで掻き混ぜる。よっぽど喉が渴いていたらしく、ストローに一回口を付けただけで半分以上のコーヒーが吸い込まれた。

「っはあ！ あー喉がスツキリした」

見るだけで爽快感が如実に表れている川島さんの笑顔。俺も做つて、自分のグラスにガムシロップとクリームを入れて混ぜる。

「そう！ 話を続けるけどさ」

もう一口、コーヒーを飲んでから（すでに残りは少なくなった）川島さんはすぐに話題を戻した。

「……はい」

そんなスピーディなハイテンションに相槌を打ってみる。

「大学入ってしばらくしたらさ、いきなり俺に言って来たんだよ

『俺、サックスやめるわ』って」

心臓が止まるかと思った　あまりの驚きに。

つい昨日の俺とダブる、父親の若い姿。そのセリフ。

「何でだと思っ？」

と、尋ねられても……ぱっと出た答えは音楽に対する将来性だったが　珍しく凜とした声音で、しかしすぐに否定される。

「修くんが生まれる事になったからなんだ」

……? ……? ……? ……? ……! ?

今、俺はどんな顔をしてるんだろう？

つまり、親父がサックスをやめた理由は……

「大学二年　あれは、冬前だったかな　の時に佳織かおりさんと付き
合い始めて、それから一年ぐらいだったから……うん、三年生の冬

だね。いきなり言われたんだ」

川島さんはいたって陽気な笑顔で言う。

「『一生懸命働いて養って行きたいから、サックスは一時やめる』。その時にはすでに両親への挨拶も終えてて、ちゃんと籍入れる用意とかもしてて。篤史って、ほら、一つの目標ができると一人でやりきっちゃうんだよね。それがすごいと思う。残念な事は、サックスをやめる期間を『一時』って言ってたのが、いつのまにか『ずっと』になってるって事」

アイスコーヒーの礼を言って川島さんと別れた後、俺は何となく足の向かった公園のベンチに座った。すでに夕陽は落ちていて、空にわずかにその色が染みているくらいだ。手元では、携帯電話が俺にもてあそばれている。

俺の頭の中ではさっきから川島さんとの会話がずっと反芻されていた。

父親は母親から妊娠の事を聞いて、突然の決意を迫られた。

川島さんの話だと、彼はすぐに答えを出したらしい。それほど悩む事なく。

川島さんいわく 決めてたんだろっね。

予感 みたいなものがあつた？ その予感って？ 妊娠の告白

？ 自分がサックスをやめる事？

父親はすぐに決断した。サックスではなく、俺を選んだ。

今の父親の姿は過去の決断の、延長線上の、言ってみれば一つの点だ。他にも選択の余地はあったんだと思うけれど……何だろう。それでも何か、胸の中に充満していた濃霧のようなものが、徐々に薄らいでいる。

……もしかしたら、川島さんは哲司から話を聞いていたのかもしれない。さすがに駅で会った事まで計算されていたとは思えないけど。

もてあそんでいた携帯電話を右手で開いた。

『結婚式の二次会で篤史に聞いたんだ』

リダイヤルメモリを覗く。すぐに目的の番号が出て来た。

『サックスやめて後悔はないのかよ？』

電話をかける。回線接続を行う機械音が、ブツブツと耳元で鳴る。

『そしたらさ、俺の子供がサックス始めてくれたらって考えたら、そっちの方が嬉しいよ、ってさ』

呼出音に切り替わると、意外とすぐに相手は電話を取った。

「哲司？ 俺だけだよ サックス、続けてみようかと思って」

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5395d/>

Re : Memory

2008年11月7日08時16分発行